

静態存在文におけるアスペクト辞“着”と“了” について—主観性という観点から—

趙宏剛

名古屋大学国際言語文化研究科

構造上の対立は事態に対する話者の捉え方の違いを反映するものであり、その違いの内実を明らかにしてこそ、それぞれの表現形式の意味に対するより本質的な理解が可能になる。本稿では、事物の静的存在状態を語る場合、どのような認識過程がなされているのか、それが静態存在文における「“着”静態存在文」と「“了”静態存在文」に見られる“着”と“了”の互換現象に如何なる影響を与えるのかを「話者の主観性」という観点から解釈する。

「“着”静態存在文」の場合、話者の視点は事物の現在の存在状態だけに置かれている。一方、「“了”静態存在文」の場合、話者は事物の今現在の存在状態だけを観察するのではなく、その状態が形成される以前の状態を含めて出来事全体について把握している。

静態存在文において“着”を“了”に置き換えられない現象も存在している。それは、話者が事物の存在状態を認識する際にその事物の現在の存在状態が形成される以前の状態について観察できなく、話者の認識、判断などといった主観性が働かないことにより、「“着”静態存在文」しか用いられないためである。

1. はじめに

本稿は、現代中国語の静態存在文¹におけるアスペクト辞“着”と“了”の互換現象について考察するものである。

静態存在文には、次の例(1a)のような“L+V着+NP”(Lは場所を表す語句、Vは動詞、NPは名詞フレーズ)形式と例(1b)のような“L+V了+NP”形式の2タイプがある。

(1) a 墙上挂着一幅画儿。(宋玉柱 1982:9)²

[壁に絵が一枚掛けてある]

b 墙上挂了一幅画儿。

[同上]

周知の通り、静態存在文では、場所(L)に存在している事物(NP)の存在状態を語る場合、動詞(V)にアスペクト辞の“着”が付く。また、NPの存在状態を表すのに“着”以外に“了”も用いることができる。すなわち“L

¹ 宋玉柱 1982 は、存在文である“着字句”における動詞は動作・行為を表すのではなく、静止状態を表す表現形式を静態存在文と定義している。また、宋玉柱 1982:1 では、“着”ではなく、“了”が用いられる静態存在文もあると指摘している。本稿では、静態存在文の定義を宋玉柱 1982 に従う。雷涛 1993 は、存在文を“是字句”、“有字句”及び“着字句”の3タイプに分類し、更に“着字句”は静態存在文と動態存在文に分類している(静態存在文と動態存在文の分類基準の詳細については宋玉柱 1982:9-14 及び雷涛 1993:250 も併せて参照)。また、聂文龙 1989:104 は、存在文における“是字句”と“有字句”は単純に「存在」を表しているため、静態存在文であると述べているが、本稿は“着”と“了”の互換現象について考察するものであるため、これらの表現形式には言及しない。

² 例文が実例の場合には、その後に出典を記す。出典が記されている例文以外は、筆者による作例である。

+V 着+NP”形式と“L+V 了+NP”形式の間には、“着”と“了”の互換現象が存在している。しかしながら、すべての静態存在文において“着”と“了”が置き換えられるわけではなく、次の例(2)のように、“着”と“了”が置き換えられない現象も少なからず存在している。この現象に関してはこれまでの先行研究においてあまり論じられていない。

- (2) a 那儿立着一座古墓。(《安徒生童话故事集》)
 [そこには古い墓が一つ立てられている]
 b^{??}那儿立了一座古墓。³

本稿では、動詞にアスペクト辞“着”が付く静態存在文を「“着”静態存在文」、動詞にアスペクト辞“了”が付く静態存在文を「“了”静態存在文」と名付け、“着”と“了”の互換現象について分析した上で、両静態存在文の意味の違いを明らかにする。

2. “着”と“了”の文法的意味の相違

従来、静態存在文におけるアスペクト辞の“着”と“了”の互換現象については様々な側面から言及されてきた。于根元 1983:117 は、“着”と“了”の間に互換現象が備わっている要因について、静態存在文において状態の形成は動作完了の結果であり、従って動作の完了を示す“了”が用いられると指摘している。

李临定 1986 は、存在文は事物の現在の存在状態を表しているため、「持続」を表すアスペクト辞の“着”を用いて表現するのが最も的確であると指摘する一方、現在の存在状態は実現された状態であるため、「完了」を表すアスペクト辞の“了”を用いても文の意味は変わらないと指摘している。聂文龙 1989:97 は、“着”は状態動詞の後に位置することによって動作完了後の状態の持続を表すため、“着”の代わりに動作の完了を表す“了”を用いても文の意味は変わらないと指摘している。また、王学群 2007 は、動詞に内在する語彙的な意味特徴、「存在場所+V 着/了+存在物」というパターン、存在物が“V 着/了”による状態結果であるなどの複合条件で“着”と“了”の互換現象を解釈してきた。

しかし、以下の例文において、“着”と“了”の互換現象が見られない。

- (3) a 书架上总是摆着一些书。
 [本棚にはいつも本が何冊か置いてある]
 b*书架上总是摆了一些书。
 (4) a 门口仍然挂着一盏灯。
 [入口には依然として提灯が一本掛けてある]
 b *门口仍然挂了一盏灯。
 (5) a 桌子上始终放着一本书。
 [テーブルの上にはいつも本が一冊置いてある]
 b *桌子上始终放了一本书。

³ 本稿では例文の先頭に付される「??」は容認度が極めて劣ることを、「*」は不成立であることを、「?」はその表現が不自然であることを示す。

- (6) a 床上一直铺着一床被。
[ベッドの上にはずっと布団が敷いてある]
b *床上一直铺了一床被。

例(3a)～(6a)のように、持続義をもつ“着”は持続義を有する副詞(“总是”、“仍然”、“始终”、“一直”)と共起できるのに対し、例(3b)～(6b)のような完了義をもつ“了”はこのような持続義を有する副詞とは共起できない。一方、次の例(7)～(10)に示すように、例(3b)～(6b)における持続義をもつ副詞を、已然義をもつ副詞に置き換えると文として成立する。

- (7) 书架上早已摆了一些书。
[本棚にはすでに本が何冊か置かれている]
(8) 门口已经挂了一盏灯。
[入口にはすでに提灯が一本掛けられている]
(9) 桌子上已然放了一本书。
[テーブルの上にはすでに本が置かれている]
(10) 床上已铺了一床被。
[ベッドの上にはすでに布団が敷かれている]

以上の比較から、静態存在文において、アスペクト辞“着”と“了”は置換可能な例が多く存在するものの、やはりその文法的意味は異なることが分かる。従って、異なる文法的意味を持つこの2つのアスペクト辞の間に互換現象が生じる要因については、さらなる考察が必要であると考えられる。

3. 主観性という観点の導入

顾阳 1997:22 は“着”と“了”の互換現象について以下の考察を行なっている。

- (11) a 桌子上放了很多书。
[テーブルの上にはたくさんの本が置かれている]
b 桌子上被小王放了很多书。
[テーブルの上には王さんによって沢山の本が置かれている]
(例(11)は顾阳 1997:22 邦訳と体裁は引用者による)

顾阳 1997:22 によると、例(11b)は例(11a)から導かれる表現形式であるのに対し、以下の例(12a)はそのような表現形式をもたない(例(12b)は不成立)。その理由として、例(11a)には動作主(“小王”[王さん])の存在が含意されているのに対し、例(12a)には動作主の存在が含意されていないことが挙げられている。

- (12) a 桌子上放着很多书。
[テーブルの上にはたくさんの本が置いてある]
b*桌子上被小王放着很多书。
(例(12)は顾阳 1997:22 邦訳と体裁は引用者による)

しかし、顾阳 1997 はどのような場合において“V 着”という形が使われるか、またどのような場合において“V 了”という形が使われるかについては言及していない。

戴耀晶 1997:92 は、“着”と“了”の互換現象には人の観察の着眼点の相違が関係していると指摘している。“着”が用いられる場合、出来事のある一部だけが捉えられ、観察の着眼点が出来事の内部に置かれるのに対し、“了”が用いられる場合、出来事全体が捉えられ、観察の着眼点が出来事の外部に置かれる。しかし、静的存在状態を描写する際に、出来事をまるごととして捉える話者の認識過程については、戴耀晶 1997 は指摘しておらず、これを言及しない限り、「“了”が用いられる場合、話者の観察の着眼点が外部に置かれる」という主張は根拠に欠けると言わざるを得ない。

構造上の対立は事態に対する話者の捉え方の違いを反映するものであり、その違いの内実を明らかにしてこそ、それぞれの表現形式の意味に対するより本質的な理解が可能になる。本稿では顾阳 1997:22 と戴耀晶 1997:92 の指摘を踏まえながら、事物の静的存在状態を語る場合、どのような認識過程がなされているのか、それが「“着” 静態存在文」と「“了” 静態存在文」に見られる“着”と“了”の互換現象に如何なる影響を与えるのかを「主観性」(subjectivity) という観点から解釈する。

Lyons 1977:739 は、主観性について、発話者は発話と同時に発話内容に対して自らの態度を表明するものと定義している(“devices whereby the speaker, in making an utterance, simultaneously comments upon that utterance and expresses his attitude to what he is saying”)。このような指摘に基づき、沈家煊 2001 は、言語の主観性は、発話内容には多かれ少なかれ発話者の“自我”を表現する成分が含まれているという言語のある特性を指している(主観性是指语言的这样一种特性, 即在话语中多多少少总是含有说话人“自我”的表现成分)。

本稿では次の例(13a)“信纸上写着几个字”という客観的存在状態を表す表現形式に対し、例(14a)“信纸上写了几个字”という表現形式は話者の主観性を反映していると考えられる。

- (13) a 信纸上写着几个字。
 [便箋には字が幾つか書いてある]
 b* 信纸上被谁写着几个字。
- (14) a 信纸上写了几个字。
 [便箋には字が幾つか書かれている]
 b 信纸上被谁写了几个字。
 [便箋には誰かによって字が幾つか書かれている]

例(13a)の“信纸上写着几个字”に反映されるのは、現実世界のある事物の現在の存在状態に対する話者の観察そのものであり、例(13b)のような“被谁”[誰かによって]は“写着”[書いてある]という客観的存在状態とは共起できない。一方、例(14a)“信纸上写了几个字”に反映されているのは、現実世界にある事物の現在の存在状態に対しての話者の全体的把握であると考えられる。つまり「便箋に字が幾つか書かれている」という客観的事態を捉えるだけではなく、「本来、無地だった便箋に誰かによって字が幾つか書か

れている」という客観的事態が形成される以前の出来事をも把握しているのである。その表現に使われているアスペクト辞“了”は「動作完了後の状態の持続」を表す働きであるため、「字を書く」という動作の完了、また「書いてある」という動作結果の持続を示している。このように、例(14a)の“信纸上写了几个字”から例(14b)の“信纸上被谁写了几个字”が導かれるのは、話者の客観的事態に対する主観的な捉え方が影響しているためであり、当該表現形式は話者の主観性を反映していると考えられる。

「主観性」という観点からみれば、自動詞が用いられる表現形式における“着”と“了”の互換現象についても説明し得るものである。

- (15) a 院子里长着一片杂草。
 [庭一面に雑草が生えている]
 b*院子里又长着一片杂草。

上の例(15a)の“院子里长着一片杂草”に反映されるのは、現実世界のある事物(雑草)の現在の存在状態に対する話者の観察そのものであり、例(15b)のように、人の感情を表す“又～”[また…]と共起できない。これに対し、次の例(16a)の“长了”は“又～”と共起し得る。

- (16) a 院子里长了一片杂草。
 [庭一面に雑草が生えている]
 b 院子里又长了一片杂草。
 [庭一面にまた雑草が生えている。]

話者は“院子里长了一片杂草”という事態をまず、「本来、庭に雑草が生えていなかった」という現在の事態が形成される以前の状態を想起し、それから「庭にまた雑草が生えているのか」(例(16b))という嫌悪感を表しているのである。このように、例(16a)の“院子里长了一片杂草”から例(16b)の“院子里又长了一片杂草”が導かれるのは話者が客観的な存在状態に対し、自分の判断(“又”[また])を加えたことによるものであると言える。話者は例(16a)に反映されている存在状態をまるごと捉え、そこには話者の主観性が働いていると言える。⁴

また、次の例(17)を見てみよう。

- (17) a 严寒来到了。芦青河又结了白色的冰层。(张炜《秋天的愤怒》)
 [厳しい冬がやってきた。“芦青河”にはまた白い氷層が形成されている]
 b[?]严寒来到了。芦青河又结着白色的冰层。

例(17a)の“芦青河又结了白色的冰层”に反映されているのは、“芦青河”現在の存在状態に対しての話者の主観的認識であると考えられる。河に氷層

⁴ 宋玉柱 1988:66 は、“坟边上长着一排小杉树”[墓の傍には若い杉の木が一行に並んでいる]は目の前の状態についての話者の描写であり、“坟边上长了一排小杉树”[墓の傍には若い杉の木が一行に並んでいる]は話者が状態の変化に着目していると指摘している。宋玉柱 1988 は「状態変化」に着目し、“着”と“了”の使用上の相違について言及しており、その見解は筆者と一致している。但し、それについて、更に深く考察はしていない。

が形成している状態は恒常的ではない。厳しい冬になってくると、河の表面に氷層が形成され、また季節が移り変わって暖かくなると、氷層が融けていく。従って、“又”[また]を用いた“芦青河又结了白色的冰层”という表現形式に反映されるのは、今現在の氷層の状態だけでなく、その氷層が形成されるまでの一連の状態変化に対する話者の認知様式である。一方、例(17a)の“芦青河又结了白色的冰层”は例(17b)の“[?]芦青河又结着白色的冰层”に置き換えると、容認度の低い文になってしまう。これは持続状態を表す“着”が話者の判断を表す“又”と共起しづらいのである。⁵

4. 反例的文法現象から見る話者の主観性

すべての静態存在文において“着”と“了”が置き換えられることはできない。次の例(18)～(21)が示すように、本稿の主張を裏から支える反例的言語事実も存在している。

- (18)a 那儿立着一座古墓。(例(2)再掲)
 [そこには古い墓が一つ立てられている]
 b[?]那儿立了一座古墓。
- (19)a 林很大, 很深, 周围绿瓦红墙, 墙根长着高大的柏树。(《人民日报》)
 [林は広く奥深く、周りには緑色の瓦が乗った赤い壁があり、壁の根元から高い柏の木が生えている]
 b[?]林很大, 很深, 周围绿瓦红墙, 墙根长了高大的柏树。
- (20)a 天上挂着一轮暑天的太阳!(老舍《赵子曰》)⁶
 [空には暑い夏の日の太陽が懸かっている]
 b[?]天上挂了一轮暑天的太阳!
- (21)a 南山坡上有座古塔, 石碑上刻着“义士荆轲里”。(《人民日报》)
 [南の山坂に古塔が立っており、石碑には“义士荆轲里”と刻んである]
 b[?]南山坡上有座古塔, 石碑上刻了“义士荆轲里”。

例(18)～(21)における“着”を“了”に置き換えることはできない。これは、“一座古墓、高大的柏树、一轮暑天的太阳、石碑”がいつ出現したのかという状況を把握するのは、話者の認知範囲の規模をはるかに超えていることによるものである。そのため、以上のような事物の存在状態を語る場合、「“着”静態存在文」が既に用意されており、「“了”静態存在文」にそぐわないものになったのである。つまり“一座古墓、高大的柏树、一轮暑天的太阳、石碑”といったものは話者が生れる前のはるか昔にも存在しており、話者の頭の中では、これらのものが存在しない状態から現実世界に出現するまでの

⁵ 例(17a)において、単文“芦青河又结了白色的冰层”の“又”を話者の判断を表す“还是”に置換え、持続状態を表す“着”との共起もできる。しかしコンテキストの観点からみれば、“严寒来到了”という前提条件の下では、“严寒来到了。芦青河还是结着白色的冰层。”は成立しがたい。

⁶ 本来「地球は太陽の周りを円を描きながら公転している」というレアリアとして認識すれば、例(20a)は動態存在文である。張旺熹・朱文文 2006:155-15では、“天上有一架飞机”のような存在文について、飛んでいる飛行機でも広い空を背景とする際に、その動きが著しく弱まってしまうため、静態的な状態と捉えることが可能であると記述している。本稿では張・朱 2006に従って例(20a)を静態存在文と見なす。

一連の流れを回想することができない。例(18)～(21)のような言語事実は本稿における主張を裏付けるものになり得る。

5. おわりに

本稿では、静態存在文における「“着”静態存在文」と「“了”静態存在文」に見られる“着”と“了”の互換現象について考察した。その結果は次のとおりである。

静態存在文に見られる“着”と“了”の互換現象については、「“着”静態存在文」で表される場合、話者の視点は事物の現在の存在状態だけに置かれている。一方、「“了”静態存在文」で表される場合、話者は事物の今現在の存在状態だけを観察するのではなく、その状態が形成される以前の状態を想起し、それを含めて出来事全体について把握しているのである。「“着”静態存在文」と「“了”静態存在文」の両者を比較すると、後者は話者の主観性が強く働いていると言える。⁷また、静態存在文において“着”を“了”に置き換えられない現象も存在している。それは、話者が事物の存在状態を認識する際にその事物の現在の存在状態が形成される以前の状態について観察できなく、話者の認識、判断などといった主観性が働かないことにより、「“着”静態存在文」しか用いられないためである。

本稿は静態存在文である「“有”構文」を考察に入れていない。「“有”構文」の場合には話者の主観性が存在するかどうかを確認し、存在するとすれば、その主観性が如何に「“有”構文」に反映されるかという現象は興味深い。この点については、今後広く存現構文への一般化を志向したマクロ的な視点を持ちながら考察していきたいと考えている。

参考文献

戴耀晶 1997. 《现代汉语时体系统研究》，浙江教育出版社。

顾阳 1997. 〈关于存现结构的理论探讨〉，《现代外语》第3期，15-25页。

雷涛 1993. 〈存在句的范围、构成、分类〉，《中国语文》第4期，244-251页。

李临定 1986. 《现代汉语句型》，商务印书馆。

聂文龙 1989. 〈存在句和存在句的分类〉，《中国语文》第2期，95-104页。

⁷ 言葉は人がこの世界に対する認知方式の反映であり、常に人間の主観性を表している（本稿の例(3)～(6)のように、“V着”が時間副詞との共起する表現が話者の主観性を反映しているということは否定できない。なぜなら、時間副詞自体は話者の主観性を表しているためである）。しかし、主観性には程度の違いは確かに存在する。例えば異なる類型の言語において主観性の表現方式が様々にあることはその一つの証明である。

沈家煊 2001. 〈语言的“主观性”和“主观化”〉, 《外语教学与研究》第4期, 268-275页。

宋玉柱 1982. 〈动态存在句〉, 《汉语学习》第6期, 9-14页。

宋玉柱 1988. 〈存在句中动词后面的“着”和“了”〉, 《语言研究论丛》(5), 南开大学出版社, 57-66页。

于根元 1983. 〈关于动词后附“着”的使用〉, 《语法研究和探索》(1), 北京大学出版社, 106-119页。

张旺熹·朱文文 2006. 〈从视点平行移动看持续体“着”的语义形成机制〉, 《汉语句法的认知结构研究》(张旺熹著), 北京大学出版社, 143-163页。

王学群 2007. 『中国語の“V着”に関する研究』, 白帝社。

Lyons, John. 1977. *Semantics*. 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press.